
Angel Beats original story

Tyke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats original story

【ZPDF】

N2265S

【作者名】

Tyke

【あらすじ】

Angel Beats!に2人のオリキャラが加わる!

果たして、2人は戦線メンバーと無事にこの世界から卒業できるのか?

かなりの駄文、亀更新の可能性大ですが、精一杯がんばって完結を目指します。

皆さん、ぜひ読んでください。

Episode · 01 (前書き)

最初はかなり短いです。

では、どうぞ。

クソ……あつけねえな……

せっかく、俺みたいな奴でも「田標」を掴んだってこいつの……

これで、おしまいなのか……

「ん？」

なんで、俺は地面で寝てんだ？

？「起きたか？」

近くに人がいるのか？

俺はゆっくりと体を起こす。

すると、右側に男が立っていた。

？「新入りか？」

「アンタ、誰だ？」

？「俺か？霧島 和樹っていうんだ。いきなりで悪いが、お前、この状況理解できてるか？」

「俺は死んだかと思つてたんだが……」

？「一応わかつてゐな。　そのとおり、ここは死後の世界だと

ここで、キミの名前は？」

「村上 勇次だ。」

和「勇次、早速で悪いんだが、入隊してくれないか?」

Episode · 01 (後書き)

いや～、始めちゃいました。（笑）

次はオリキャラ紹介なので、お願いします。

オリキャラ紹介（前書き）

IJでは、2人のキャラを紹介します。

和「オリキャラ紹介つて、書いてるけど死因書いてねえじゃん。」

作「それは、Hピソードの中で、お前に喋つてもう。」

勇「めんどくだな。」

作「それでは、どうぞ。」

オリキャラ紹介

霧島 和樹

死んだ世界戦線の副リーダーで、結成当時から死後の世界にいる。

基本はツッコミ役だが、ノリが良い為、ボケもある。

勇次を常に気にかけている。

生前は高レベルの高校に通つており、かなりの秀才

容姿はそれなりに高く、NPCからラブレターをもらつたりするが、本人は無自覚。

武器は主にサブマシンガン。たまに、ナイフも扱う。

戦闘力も高め完璧人間っぽいが、唯一の弱点は時間に少々ルーズなこと。

村上 勇次

音無の少し前に死後の世界に来た。

生前は不良であり、ケンカが強い。

1人で行動することが、多くぶつきらぼうな性格。

生前は学校に通つてはいたが、授業をあまり受けてない。

しかし、判断力や、洞察力などは高い。

バンドを組んでいて、ギターを弾いていた。

そのため、ガルデモメンバーと居ることも多い。

酒、タバコを多く消費するため、一人でギルドに行つてはチャーチと晩酌をしたりしている。

武器は主に日本刀。
使わない。

ハンドガンも持っているが、あまり

オリキャラ紹介（後書き）

のちのち、オリキャラに関しては設定を多少変えるかも知れません。

Episode · 02 (前書き)

勇「てめえ、1話1話が短いんだよーー。」

作「『めん、それはしじうがない（～）』」

和「本当に短くてすいません。作者がアホでこのサイトを上手く使いいこなせないのが原因です。」

作「和樹、冷静に解説しないでくれない?というかアホ呼ばわりすんなー！」

勇「こんなグダグダで悪いけど、まあ読んでつてくれ。」

勇「入隊？」

和「そうだ。俺達死んだ世界戦線はある敵、通称天使と呼ばれる奴と戦ってるんだが、入ってもらえないかな？」

勇「天使って、どんな奴「あなたたち、何をしているの？」

勇次と和樹は後ろを振り向くと、小柄な少女が立っていた。

和「言つた矢先に出てくるとわ、嬉しいね。勇次、こいつが俺らの敵だ。」

勇「こいつが！？　どう考へても敵じゃねえだろ？」

天「最終下校時間は過ぎて『いるのに、なんで外にいるの？』

和「悪いね。ちょっと野暮用があんだよ。」

天「そう。早く寮に帰る気はないのね？」 ガードスキル hand sonico

そう言つと、天使はいきなり出したsonicoを和樹に突いてきた。

和「甘いな。俺も持つてるよ。」

和樹は簡単にナイフで天使の攻撃をはじく。

和「勇次、早く逃げるぞー！」

そう言つて、校舎に逃げる和樹。

しかし、いきなりの戦闘で混乱を起こしてゐる勇次は動かない。

グサツ

あっけなく、天使に胸を刺された勇次。

勇（なんでまた死なねえといけないんだよ…）

その場で倒れた勇次。

天使はガードスキルを解除し、女子寮に帰つていった。

和「あちやー、いきなり過ぎて理解できなかつたか。
しうがねえ、保健室に運ぶか。また日が覚めたら、
勧誘するか。

」

遠くから見ていた和樹はそう呟いたとか

Episode · 02 (後書き)

本当に短くなるのわ、申し訳なく思っています。

徐々に瘦くしていくつかなと思います。

Episode・03(前書き)

作「まだまだ、オリジナルで進みます。」

勇「別にいいけど、もつもつと頑張るのもなんの?」

作「俺にはこれが限界」

和・勇「…………」

勇「ん…」

勇次は目が覚め、体を起こすと、ある異変に気付く。

勇「なんで、キズがないんだ？」

そう、勇次は昨夜に天使に胸を刺されたのだが、キズ痕一つも残つていなかつた。

そして、勇次は保健室を退室する。

勇「とりあえず、屋上にでも行くか。」

屋上で学校を見渡す勇次。

すると、ギターの音色が聴こえてきた。

勇「アコースティックギターだな。でも、どっからだ？」

勇次は気になつたので、屋上から音が聞こえた校舎に戻つていく。

（）

勇「！」のあたりの気がすんだが…」

ギターの音色を聞きつけた勇次だが、場所が分からないうらしい。

和「だから、～したほうがいいって。」

? 「和樹さん、それだとつむりも厳しいんですよ…」

勇「ここかな。」

とつあえず、聞こ覚えのある声だったのでそのまま教室に入る勇次。

ガラッ

「 「 「 」 」 」

和「お～、勇次ようやく起きたかあ。わざわざ来てくれて助かったよ。」

勇「いきなりで悪いが、この世界はどうなつてんだ？俺はあいつに刺されたのに、なぜ死んでねえんだよ？」

和「この世界は死なない。それは分かつたる。しかし、死ぬ程の痛みは伴つと。」

勇「ふざけんなよ？そんなふざけた世界があつてたまるかーー！」

和「んな事言つてもしょつがねえだろ。現実を受け止めろ。」

? 「和樹さん、この人は？」

話に割りでくる紫色の髪をした少女。

和「ここは新しき」の世界に来た奴だよ。村上勇次って言つんだ。

」

勇「んでも、ここらは昨日戦つた戦線の奴らか？」

和「そのとおり、ここらは戦線の陽動部隊のGirls Dead Monsterだ。」

勇「Girls Dead Monster？」

和「まあ、戦闘部隊とは違つてここにつけばバンドであるけどな。結構、人気あるんだぞ。」

勇「だから、ギターの音が聞こえたのか。」

和「メンバーも紹介しどう。ギター担当のひさ子に、ベース担当の関根、ドラム担当の入江、そして、リーダーでボーカルの岩沢だ。」

それを紹介する和樹。

それぞれにあいさつを済ませた、勇次は再び質問をする。

勇「思つたんだが、なんで制服が違つんだ？全員死んだ奴じやねえのか？」

和「それはだな「グウ～」ビーフした、関根？」

関「えへへ、お腹がちゅうとね…」

和「ちゅうひ、昼時か。しょうがない。勇次、飯を食いながら、この世界についてを話そひ。みんなも今日はおひるから一緒にどうだ？」

岩「なら、お言葉に甘えて。」

食堂

6人それぞれが、食べ始めた事でこの世界の事を話す、和樹。

勇「つまり、NPCと、死んだ人間、天使、そして、神がいて、その神にお前らは抗おうとしてるってことか。」

和「そうなるね。で、勇次。お前は入隊してくれるか？」

勇「別に、神に抗おうとするのを賛成だが、縛られた感じでなんかやだな。」

岩「確かに、私もそう思つたけど、今は、ひたすらバンドをやって楽しく過ごせている。」この和樹、だつてかなり自由に過ごしているぞ。」

岩沢がそつと、和樹はある提案をする。

和「とりあえず、うちのコーダーに会つてみないか?俺よりよっぽど、頼りになる。」

勇「そうだな。一度、そいつに会つてみたいしな。紹介してもらおうか。」

咲「私もゆづこひよつと話があるから、一緒に行くよ。」

や「やつし、私たちの出番ね。」

作「そうこればれ、昨日A n g e l B e a t s! の漫画読んだけ
ど。」

ゆ「私の可憐な口調づこりやったって。」(謎)

作「改めて、ゆうつへはバイオレンスな性格だと分かった。」

ゆ「あなたも一回死になさーーー！」

作「わあー、銃を撃ちながり」つちに来たーーー！」

ゆ「待ちなごよーーー！」

ダダダッ

和「…………。ついあえず、episode04をどうにか。」

作戦本部（校長室）に向かう途中、勇次は岩沢と談話をしていた。

勇「そのコーダーはどんな奴なんだよ？」

岩「まあ、一言で言つなら男勝りで、負けん気の強い女の子って感じかな？」

和「会つてみれば分かるよ。」この校長室が、死んだ世界戦線の作戦本部だからな。あと、今い言葉がないと、トラップが発動するから気をつけろよ。」

和樹が「神も仏も天使もなし」と言って、扉を開ける。

和「おい、ゆり。新しいメンバー候補をつれ

!?」

ヘブッ

すると、和樹の眉間に靴が当たる。

ゆ「和樹くん？あなた、また朝のミーティングサボったわね？」

和「違うって、朝は毎日しても弱くて「パンーー」……。」

ゆつを見ると右手にはハンドガンがあり、和樹の頭上には弾痕が

ゆ「何か言いたいことは？」

ゆりが、満面の笑みを向けながら和樹に問いつと、

和「イヒ、ナンデモアリマセん…」

言い訳も囁つ雰囲気ではなくった。

勇「なんか、岩沢が言ったこと、分かった気がしたわ。」

ゆ「で、その新人候補くんは？」

和樹が平謝りして機嫌が戻ったところで、勇次を紹介する。

ゆ「ちなみに、どれくらいこのこと話したの？」

和「とりあえず、天使、死なない」と、NAPJまでは話した。」

ゆ「まあまあね。初めまして、勇次くん。私が、この戦線のリーダーをやつてるゆつよ。よろしくね。」

そつ言つて、右手を差し出すゆつ。

勇「よろしくな。とりあえず、この戦線の目的はなんなんだ？」

ゆ「ある程度聞いたなら分かるでしょうが、最終目的はこの世界を手に入れることよ。」

勇「なるほどね。それは面白やつだから、俺も入れさせてもらひやつかな。改めてよろしく頼むよ。」

ゆ「じゃあ、主要なメンバーを紹介しておくわ。」

そう言つと、ゆりはその場にいた日向、大山、藤巻、松下、高松、椎名、TKを紹介する。

ゆ「あれ、野田船は？」

バンッ！！

扉を見ると、ハルバードを肩に担いでいる少年が立っていた。

? 「ゆりつペ！新しい奴が入つたって、本当か！？」

ゆ「ええ。私の前にいるのが、新しく入った村上勇次君よ。勇次君、このバカっぽい人が野田君よ。」

野「貴様が新入りか? ヒヨロそつな奴だなあ。」

それを聞いて勇次は、力チンと頭に來たらしい。

勇「そういうのは、相手の実力を見てからにしてほしいね。とにかく、ゆりが言ったとおりにお前がバカというのは確認できたよ。」

勇次が、やれやれといった感じで囁ひと野田はかなりキレた。

野「貴様、俺に挑発するとは良い度胸だな！…そこまで言ひながら、俺と勝負しろ！…」

勇「まあ、いいだろ。俺も久々にイラライラしてるとかうな。気分転換させてもらおうかな。」

既に、勇次と野田の一発触発状態にオロオロしだした大山がゆりに話しかける。

大「ゆりつべ、いいの！？いきなり、ケンカしてるけど？」

あると、ゆりはあつかけらかんど、

ゆ「別にいいんじゃない？それに勇次君の戦闘力も分かるいい機会
じゃない」

和「そうだな。勇次の武器とかも考へれるしな。ただ、ここじゅな
んだから、屋上にでもこいつ。

そして、ゆり達のメンバーも屋上に移動する。

【屋上】

2人が準備している間にゆりがあることを気付く。

「ちょっと待って。勇次君、あなた武器がなかつたわね。」

和「まあ、野田がハルバードだからな。藤巻、お前の武器を勇次に貸してやれ。」

そう言って、藤巻が勇次に長ズスを貸さうとするが

勇「いや、素手でやる。」

と、言い出した。

ゆ「ちょっと、相手の野田君はこの戦線でも、かなりの戦闘力な
よ。それでも、平気なの！？」

勇「大丈夫だよ。それより、和樹。」

ゆりの忠告をやんわりと断つて、和樹に話しかける。

和「ん、どうした？」

勇「この世界じゃ、死なないんだよな？」

和「ああ、死ぬ痛みは伴つが、大丈夫だ。」

勇「じゃあ、最悪人殺しみたいになつても問題ないな。」

和「ああ、だから思っておいたやれ。」

Φ「ちるちる、準備はいいかしら？」

お互いが頷くと、ゆうせん印画図を出す。

ゆ「それじゃ、スタートーーー！」

そういうと、同時に2人は間合いを詰め、野田がハルバードを振りかぶる。

野「死ねええーーー！」

しかし、難なく勇次はそれを避けると、カウンターパンチを野田にお見舞いする。

その後も闘いは続いたが、圧倒的な力で勇次が野田を追い詰める。

勇「降参したら、どうだ? これ以上やつてもムダだと思ひついで。」

そう言って、角に追い詰める勇次。

野「うるせえええーーそ、簡単に負けてられるかよーー。」

最後に振りかざした野田だったが、勇次の拳が当たり踏ん張れず屋上から落ちていく。

ゆ「それまでよ、あなた相当強いのね。かなり戦力になりそうだわ。田向君は後で野田君を回収して来てね。武器も近距離タイプのほうが良さそうね。」

戦線メンバーも勇次の力を見て、かなりびっくりしている。

藤「お前、相当やるな！－」

大「凄いね！－あの野田君を倒すなんて。」

T「Oh , you are superboy!－」

高「やりますね。」

和「お疲れさん。あそこまで、野田に攻撃させなかつたのは、お前
が始めてだぜ。」

勇「それは嬉しいが、1人もあいつの心配してねえけど、良いのか
？」

和「だから、死ないと分かつてゐるから、落ち着いてるんだよ。大
丈夫だよ。それにな、ゆりと一緒にいると、死ぬのが当たり前にな
るしな。」

ゆ「和樹君、あなた次は眉間に六が空くわよ。」

和「い、いやだなあ。軽い冗談だつて。」

ゆ「次からは気をつけなさいね。そういうえば、岩沢さん。話すこと
があつたよね？」

ゆつは、和樹に忠告して吉沢に顔を向けながら話す。

岩「実は、ギターの弦のストックと、アンプが底をついたんだ。だから、ゆりに補充を頼みに来たんだ。」

高「ゆりつぺさん、弾薬もたくさんは残ってなく、近距離タイプの武器も現在はないので、一緒に補充したほうがよろしいかと。」

高松が、岩沢の話に付け足すと、ゆうはしばらく考えて勇次に顔を向ける。

ゆ「そうね、勇次君。あなたは明日、ギルドに行って補充を要請してきてくれないかしら？」

勇「別にいいが、そのギルドっていうところを知らないんだが。」

ゆ「それは、大丈夫よ。副リーダーの和樹君も一緒に行かすから。」

それには、和樹が反論をする。

和「ちょっと待つてよ! なんで、俺もあんな所に行かねえとな
ないの?」

すると、ゆりは和樹に歩み寄って

ゆ「あなた、最近ミーティングサボったり、遅刻したりしてるから、
その罰よ！！」

と言つて、和樹の頬をつねつている。

和「いひあい、いひあい！！わはつたはう、へをはなひてーーー（痛
い、痛い。分かつたから手を離して。）」

岩「なんか済まないな。押しつけた感じになつて。」

残つたのは、和樹、勇次、岩沢の3人になった。

ゆりが、屋上から下りて行くとさうぞうとメンバーを下りて行く。

ゆ「時間も時間だし、今日はとつあえず解散にしましょう。勇次君、和樹君頼んだわよ。」

勇「別に『仮想』なんか。どうひこしる、武器を持つて」ないと行けないからな。にしても、ゆうつて、あやこまでだとは思わなかつたな。」

和「まあ、これくらいは慣れたよ。それより、明日もあるし、今日はお前の入隊祝いでも、するか。岩沢、ガルデモメンバーも一緒にどうだ。食券ならまだたくさんあるからまたおいでね。」

岩沢「じゃあ、先に行つて。みんな、呼んでくるから。」

勇「なんか、悪いな。」

和「いいよ、これくらい。それよりもこれからはよろしくな。」

2人は握手をすると、食堂へ向かう。

その後、合流したガルデモメンバーと一緒に大いに盛り上がった。

Episode · 04 (後書き)

作「なんとか、逃げ切つたぜ……」

勇「なあ、いつになつたらアニメの一話に入るんだよ。」

作「とりあえず、あと2話はオリジナルで進めますよ。」

和「とりあえずひ、俺の出番だ」「見つけたわよ……トヨケン、おと
なしく死になれ」「……」「

作「やべえー！和樹、また今度聞いてやるからそれまでなー。」「

ゆ「待ちなさいよーー。」

勇「なんか、大変だな。作者も…。」

和「とやつよつ、今の完璧に自爆じやん…。」

Episode · 05 (前書き)

すこません…

前回の投稿から10日以上経ってしまいました。

これからはもう少し早めに投稿していきたいです。

【校長室】

明朝、和樹と勇次は朝のミーティングのため、校長室でゆりから指令を受けていた。

ゆ「今回の単独ギルド降下作戦は、勇次君の武器、弾薬、そしてギターの弦などを調達してもらつた。」

和「いや、トリップは解除してくれてんだうな？」

ゆ「当たり前じゃない。新人くんにこきなつて酷なことさせやしないわよ。」

ゆづは、さう断言すると

和「なあ、ひとつ早く終わらすか。勇次行くぞ。」

そう言って、校長室を後にする和樹と勇次。

勇「ギルドって、どうあるんだよ?」

和「ギルドは地下にあるんだ。そりで、戦闘隊とは別の部隊が、戦線の武器を作ってくれている。」

その後、和樹と勇次は体育館からギルドに向かうと、どんどん地下に潜っていく。

勇「なあ、あとどれだけ歩けばいいんだよ?」

かなり歩いたせいか、勇次には疲労を顔に浮かべている。

和「ほら、あそこにマンホールがあるだろ？あそこから入って、階段を下ればギルドに着くぞ。」

ついに、辿り着いた勇次は安堵の顔を浮かべるが

和「言つとくけど、帰りのほうがシラいぞ。2人で弾薬などを運ばねえといけないんだから…」

勇「それを忘れてた……」

絶望に落とされる勇次。

しかし、和樹はそんなことにお構いなしに、マンホールに下りていく。

【πΣ#】

ギルド班A 「おい、和樹。遅かつたな。」

和「わらい、ちょっと道草食つてた。それよりチャーは?」

A 「チャーさんなり、最終調整とか言って、まだ工場にいるよ。」

それを聞いて和樹は、勇次を連れて工場に入る。

工場に入ると和樹は、1人の工員に声をかける。

和「チヤーさん。」

チ「お、和樹。今田は、お前が当番だったか。ん? そいつは?」

和「こいつは新しく入った村上勇次ですよ。勇次、こちらがここ
リーダーのチャーサんだ。」

そう言って勇次を紹介する和樹だが、勇次はチャーを見るなり様子が変わっていく。

勇「チャーハン！？ なんで、あなたがこんなところにいるんですか！」

和「え？ チャーさん、 勇次と知り合いなんですか？」

チ「ああ、生前の時にな。勇次と聞いたからまさかとは、思ったが
勇次、お前も未練残してこっちに来たのか
？」

しばりく、静寂になつたが、勇次は

勇「…………それはまた今度話します。今はこうあるので、落
ち着かせてください。」

チ「そうか。分かった、また今度ここに来い。お前が話せるようになるまで待つてやる。」

和「そう言つことなり、また来ないとな。勇次、今日は荷物も多いし、早く上がれ。」

勇「ああ。じゃあ、チャーリーさんまた必ず来ます。」

しばらく、ギルドで勇次の武器の調整や、補充をした後地上に向かう2人。

和「なあ。」

和樹が、リアカーを押しながら勇次に質問をする。

和「お前はなんでここに来た？それに、チャーさんにも話さなくてよかつたのか？」

勇「ああ、もう少し自分で折り合いかつてからみんなに話すよ。」

和「そつか……。なら、そんときにじつくり聞かせてもらひよ。」

そう言つと、2人は会話のないまま、地上に戻る。

【校長室】

ガ
チ
ヤ

和「今、戻った。」

ゆ「遅かつたわね。待ちくたびれたわ。」

和「そう言つなつて。2人で大変だつたんだぞ...」

ゆ「勇次君もお疲れ様。いきなり、悪かつたわね。」

勇「まあ、いいよ。とりあえず、ガルデモメンバーに弦とか持つていいか?」

ゆ「それじゃあ、頼むわね。和樹君はちょっと残つてて。」

勇次が、校長室を出るとゆうはゆっくりと和樹に問いかける。

Φ「どんな感じ？勇次君は結構良むけりだけど。」

和「どうかな。まだ、過去の事は話してくれなかつたし、まだ少し距離感があるかな…。」

曰「でも、まだ戦線入つて2日目だぜ？そんなもんだろ？」

田向は和樹に疑問をあげるが、

和「といつより、あまり信用していない感じだった。」

ゆ「もしかしたら、過去が絡んでるのかもしれないわね。和樹君、
ゆつくりでいいから勇次君と私達の距離を近づけるようにできない
かしら?」

和「まあ、なんとかしてみるよ。」

こうして、勇次が戦線に入つて最初のオペレーションは無事に終了したのであった。

Episode · 06 (前書き)

和「また、投稿するのに時間がかかったな……。」

作「これからは1話を短くして投稿期間も短くしてみるよ。」

勇「作者は感想が欲しいようだ。書いてもいいよといつ人は書いてやつてくれ。」

和樹と勇次が、ギルドに行ってからの数日後

勇次達、戦闘班メンバーは校長室に集められていた。

和「全員揃ったか?じゃあ、ゆり始めよ。」

ゆ「今日は新しい作戦を実行するわよーー!」

一同にどよめきが走る。

曰「で、どんな作戦だ?」

和「まあ、今回は天使を殲滅できるかもしれないからな。勇次、カーテンを閉めてくれ。」

勇次がカーテンを閉め部屋を暗くなると、降りてきたスクリーンに作戦名が映し出される。

ゆ「今回は、オペレーションマインヘルを行つわーー。」

田「マインヘル? なんだそりゃ?」

高「マインは私にこういう意味がありますが。」

和「そっちのマインではねえな。直訳すると地雷地獄だ!」

ゆ「そう。今回はギルド特製の新兵器の地雷を使用するわ。天使にはその名の通りに地獄を見てもらいましょう。」

恐ろしいことは微笑みながつむつてメンバーは全員顔を惹きつけさせた。

ゆ「作戦はこうよ。まず、校庭に地雷原を設け、そこに田向君、大山君、高松君が天使を導いてちょうどいい。和樹君が、起爆装置のスイッチを押して、野田君、藤巻君、勇次君が爆発が収まつたら天使に突撃してね。」

野「ああ。」

藤「了解だぜー。」

大「天使つて、どうやって誘導するの？」

ゆ「それはあなたたちが考えてちょうだい。そこまで、手が回らないわ。」

田「それはひでえぜー……ゆうつペー。」

あまりの待遇に田向は叫ぶが、ゆうは無視する。

ゆ「作戦は、20・00から始めるわ。それまでに、地雷を校庭に埋設するわよ！…それではオペレーションスタートーー！」

【ガルデモ練習場所】

関「そつかあ、ゆりつぺさん、新しい作戦たてたんだ。」

勇「ああ、全くムチャな作戦だと思つんだがな……。」

勇次はミーティングが終わるとその足でガルデモメンバーに会いに来ていた。

「まあ、いつものことだしね。それより私達はどうすんだ?」

作戦の内容よりもライブがしたくてウズウズして勇次に聞く岩沢。

勇「今日はなじだと、言ってたな。俺はライブ見たことないから分かんねえけど、すげえ人気なんだってな?」

今回はライブがないと聞き少し落ち込む岩沢を尻目に根井とが答える。

関「まあね~、みんなNPCだけど私達のライブは結構見にきてくれるよ。」

入「この前も岩沢さんは、ファンレターもらったたしね。」

関「でも、ひわ子さんまだ一回もファントレターもひつた事がな
くブツー。」

ひ「話を作り替えるな！！」

話を勝手に変えた為にひわ子にゲンコツをへりつ闇根。

勇「まあ、樂しそうなのは分かったよ…。」

苦笑しながら勇次は言ひ。

しかし、既に別のことを考へているような顔をしている。

ひ「ん？ 勇次、どうしたんだ？」

勇「いやな、ちょっとイヤな予感がな…。」

入「今回の作戦ですか？」

勇「ああ、なんか誰かが酷い田にあいそつた気がするんだ。」

祐「まあ、ゆりに誰かが犠牲にならんじやないかな？やつはいつに
はいつもあるから気にするなよ。」

勇「そうだと、いいんだが…。」

勇次は、頷きながら若沢の言葉を信じようとしたが、頭の奥に引つ
かかつるような感じが残っていた。

そして、勇次が思った予感は的中するところとなる。

Episode · 06 (後書き)

和「なんで、こんなに遅くなるんだよ?」

作「いやあ~、最近ボーダーブレイクって、ゲームにハマつてて。」

勇「……今年、大学受験じゃねえのか?」

作「多分、大丈夫っしょ。」

和・勇「……。」

Episode · 07 (前書き)

作りの度は1ヶ月も放置してすみません。m(ーー)m

勇「これを見てくれての方はいんのかよ。」

19 : 55 【校庭】

無事に地雷を敷設して、待機中の戦線メンバー。

勇次は未だに心の奥に違和感が残っている。

勇（どんどん、イヤな予感が大きくなってきた気がする。無事に作戦が終わればいいんだが…。）

そんなことを思つている間に、日向達の天使誘導の班女子寮付近で待機している。

和「そろそろ時間だけど、ちゃんと天使は来るかな？」

ゆ「誘導部隊がちゃんとしていれば、問題ないわ。ただ、日向君たちだからね……。」

ゆりは誘導部隊の人選に不安があるらしく、少し歯切れの悪い言い方をする。

勇「お前が選んだんだろ……。」

それを見逃さずにつつこむ勇次

ダダダッ！

和「来たみたいだぜ。」

日「來たぞーーーーー。」

女子寮付近で誘導の役目を受けていた日向達が走つて来る。

ゆ「和樹君、準備して置いて。総員、戦闘準備用意ーー！」

それを見て、ゆりは総員に戦闘準備を促す。

天使は、ゆっくりと近づいて来ている。

和樹はすでに地雷の起爆装置に手をかけており、勇次、野田、藤巻の3人もいつでも飛び出せる準備を整えている。

そして

ゆ「起爆開始……！」

ゆりの合図により、ボタンを押す和樹。

バアアアアン……！

見事に地雷が起爆し、天使が爆発に巻き込まれる。

ゆ「野田君たち、炎が収まつたら行くわよ。」

現在、天使は炎に包まれており、容易に近づくことができない。

あと少しで、天使を追い詰める。

ほとんどの戦線メンバーが思った、その時。

和「ハア…、ハア…、」

ゆ「和樹君？」

突然、頭を抱え苦しんでいる和樹。

ゆりもこれには驚きを隠せないでいる。

いきなり叫んだかと思うと、そのままその場に倒れてしまつた和樹。

ゆ「和樹君？和樹君！！」

ゆりが和樹の体を揺さぶるが、起きる気配が全くない。

曰「ゆりつペ、一体和樹はどうしたんだ!?

ゆ「分からぬわ、とりあえず引き上げるわよーー野田君たち、天使に足止めをくらわせてーー！」

和樹が倒れたこれにより、事実上の作戦中止を告げるゆりは待機中

の野田たちに命令を下した。

そして、松下が和樹を背負い戦線メンバーは野田たちを残して離脱していった。

作「最近、亀更新で本当にすいません……」

和「しかも短い……」

勇「お前、今年受験じゃねえのか？」

作「年内の完成はムリだけど必ず『元結わせる』。」

和「まあ、監査係に田で見てやつてください。」

【保健室】

なんとか、天使の追撃を振り切った戦線メンバーは倒れた和樹を寝かせて、和樹が倒れた原因を話し合っている。

ゆ「今日は和樹君、調子が悪かったのかしら?」

日「そんな訳がねえ。オペレーションまでは普通だったんだぞ。」

あれやこれやと述べているなか、勇次は一つの推測を出す。

勇「なんか、生前にトラウマになることがあったから倒れたんじゃねえのか?」

ゆ「根拠は?」

勇「いや、 Ireneと書つたことはないが、もしかしてなと思つて。」

高「そういうえば、私たちは和樹さんの生前の記憶を聞いておりませんね。」

大「ねえ、ゆりっぺ。和樹君の生前に何があつたのか知つてゐるんでしょ？」

大山がゆりに問いかけると、ゆりはひとつ考えてから日向を見る。

ゆ「…確かに私、日向君、が和樹君と付き合ひが一番長いけど、私たちも和樹君がここに来た理由は知らないの…。」

全「…？」

ゆりが、やうやく戦線メンバーには驚きを隠せない。

田「もちろん、俺らも和樹から何回も聞いたとした。しかし、いつもはぐらかされたんだ。」

日向がやうやく沈黙が流れる。

そして、その流れを断ち切るよつにゆりが口を開く。

ゆ「じばらくは様子を見るしかないわね。一旦解散しましょ。和樹君が起きたらまた集合をかけるから。」

ゆり以外は保健室を出していく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2265s/>

Angel Beats original story

2011年9月5日12時44分発行